鬼と龍

クレト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鬼と龍

【Ｎコード】
Ｎ４４０５Ｚ

【作者名】
クレト

【あらすじ】
オリジナル小説サイト「真紅真愛」にて公開しております。
残虐非道な皇帝の古くからの友人である、女好きと剣術で有名な白龍は彼の元を訪れた。
その理由は“強い花”の噂を聞きつけたからだ。
だが、そこにいたのは誰からも恐れられる“存在してはならぬ者”だった。
龍シリーズ第二弾です。

第1話「存在してはならぬ者」

世は憎悪に包まれていた
巨大な国を支配するのは残虐なる皇帝、蛇黒(だこく)
彼が行うは、非道なる政治
民が課せられた重税はもちろん
少しでも不平不満を持ち出せば
一族もろとも、見せしめに火あぶりの刑を執行され
皆殺しにされた

作り上げた強固な武力により
国に生ける者全てが、苦しい生活を強いられていたのである

無論、蛇黒に対する不満をかきあつめ
いくつもの義勇軍が誕生した
だが、何年もの間、蛇黒軍に勝てる軍はなく
次から次へと弾圧されていったのである

そして、唯一残された国民の希望が狼銀(ろうぎん)軍であり
蛇黒軍と狼銀軍がまた幾年にも渡って
戦を繰り広げていたのである

しかし、未だ狼銀軍は勝機が見出せないでいた
何故ならば、ただ一人の
“存在してはならぬ者”に勝てないでいるからだ

その者は“紅い鬼”と呼ばれ
狼銀軍の屈強な兵達を次から次へと倒していっているからである

第1話「存在してはならぬ者」

「蛇黒皇帝陛下！！この度の勝利、心からお喜び申し上げます！！」

宴の間にずらりと並んだ家臣達からの祝言に、蛇黒はにやりと笑みを浮かべた

「勝利・・・、貴様達はこれを勝利と呼ぶのか？」

蛇黒の問いかけに家臣たちはお互いに顔を見合わせる

「数々の義勇軍を破ってはきたが・・・

最後の義勇軍がこの2年間、未だ殲滅することが出来ていない

ましてや、寄ってきた野良犬を、追い払う程度の戦だ！！」

怒りにまかせ

蛇黒は杯を力いっぱい床に投げつけた

「この程度の戦を、勝利などと思った覚えなど無いわ！！」

響き渡る蛇黒の怒声に

家臣たちは怯え、より一層深く頭を下げる

家臣とはいえ、蛇黒に彼らの顔は見えていない

異様な光景ではあるが

家臣と呼ばれ、大広間に整列している彼らの顔には

蛇黒軍の紋章が描かれた真っ黒な布がつけられてある

まさに、誰が誰なのかはわからない状態なのだが

これは蛇黒が皇帝になった時に義務付けられたものであり

その真意は彼にしかわからないものでもある

新しい酒の杯をかたむけながら

蛇黒はつまらなそうな表情を浮かべた
家臣たちの間に不穏な空気が流れた
だが、そん中、一人の家臣がすっと前に現れ
左手で拳を握り、額に当て、礼を現した

「恐れながら、申し上げます」

「なんだ？」

「最後の義勇軍を率いる総大将、狼銀は蛇黒様の古くからの知人であるとお聞きいたしました」

「そうだ、あやつとは同門の出だ、それがどうした？」

名も告げず、その家臣はにやりと笑みを浮かべ、こう言った

「だからこそ、あなた様の攻略もご存知なのでは？」

一人の家臣の不躾な物言いに、場内は恐怖のざわめきがおこるだが、相反して、蛇黒は口の端を吊り上げ、ふっと鼻で笑う

「これが攻略？私は勝ってもおらぬが、負けてもおらぬ

城の塀の中にも、一歩たりとも入れたことなど無い

これのどこを攻略というのだ？」

「あぁ、これは失礼いたしました。確かに攻略ではございません

ただ、あなた様に勝ちもしないが、負けもしない軍略を持っている

なるほど、つまりはあなた様と同様の才を持っている

というわけですかな？」

ひょうひょうとした物腰の家臣に

周りの家臣たちは布の下でひそかに青褪めた

だが、蛇黒は笑みを崩すこと無く、会話を続けた

「だが、あやつらが勝つことは無い

ここに入ってくることすらも、出来やしまい」

「そう・・・まさしくその通り

何故なら、ここには・・・・・・・“鬼”がいる」

跪き、礼をとっていた家臣が無礼にも

すっと立ち上がり、ゆったりと蛇黒のほうへ歩いていく

「“鬼”とは古来より言い伝えられてきた、恐るべき存在
悪の象徴でもあり、現世に“存在してはならない者”とされる
伝説の忌むべき“恐れ”だ・・・・・・」

家臣の無礼を咎める事も無く
蛇黒は面白そうに、その者の様子を眺める

「それがここに存在し、挙句、悪名高い“蛇黒”を守っている・・・・・・」

そう呟いた家臣はすらりと一本の剣を取り出した
驚いた家臣たちは、広間から慌てて逃げ出す

「だが、それもここまで」

なおも、蛇黒は余裕の笑みを浮かべ、杯をかたむける

「その命、頂戴いたす」

一人の家臣は剣を構え、力強い一歩を踏み出した

がきんっ

乾いた音が響いた
振り上げたはずの剣は宙を舞い
背後の柱へ突き刺さる

家臣の目前には甲冑をまとった一人の存在
そして首元にはひんやりと刃の冷たさ

首を刈られるその瞬間
家臣の片手から、もう一本剣がすらりと姿を現す

再び、剣同士の音が響いたかと思うと
すぐに二人の間に距離が生まれた

家臣の顔にかかってあった布が床に落ちる
晒されたのは一人の青年の顔
そして彼の目に映ったのは“鬼”の存在

だが、彼は感じた
“鬼”とは呼ばれるものの“鬼”のようではないと
その姿は鬼とはかけ離れ
恐ろしいほどの真っ直ぐな瞳を持った

一人の“少女”の姿だった

続く

第2話「紅鬼」

蛇黒を守るように少女は青年の前に立ちはだかる
一方、青年はその姿に、ふっと笑みをこぼした

「なるほど、鬼が守るのはこの軍ではなく
蛇黒という存在、ただ一人か」

小柄な体格に似合わない、長身の剣を少女は構える
青年のほうは逆に剣を降ろしたが
少女はそれにかまうことなく、一歩を踏み出す

だが、突如、背後から衝撃を受け
少女の体は床に跪いた

「悪ふざけが過ぎるぞ、白龍（はくりゅう）」

「ははっ、悪い悪い。ついつい面白くってな、蛇黒」

青年――――白龍はにこやかな笑みを浮かべた

少女が受けた衝撃は、蛇黒からのもので
彼女は抵抗することなく、跪いたままだ
だが、その手にはしっかりと獲物が握られたままで

白龍が一歩近づいた途端、力強く拳を握り締めた

「控えろ、鬼。そやつは私の馴染みだ

手を出すことは一切許さぬ」

蛇黒の一言に、拳の力をゆるめた
その様子に白龍は彼女の目の前に屈みこみ
指先で、彼女のあごを上げさせた

「ずいぶん、うまいこと躾けてあるんだな」

まるで犬を見ているかのような白龍の発言にも
彼女は一切の抵抗を見せず
変わらない真っ直ぐな瞳で彼を見る

「おいおい、そんなの有りかぁ・・・？」

「蛇黒様！！お怪我は！？」

誰もいなくなった広間の入り口から二人の姿が現れた
そのうちの女のほうは慌てて蛇黒の近くに
もう一人の男はゆったりと背伸びをしながら入ってきた

「しっかし・・・“不敗(まけしらず)の白龍”が知り合いとは・・・
あんたには驚かされますなぁ、蛇黒陛下」

ゆったりとやってきた男のほうを白龍は振り向いた

「蛇黒の精鋭隊の黄猿(おうえん)将軍か」

「お、知っていただけているとは、光栄な」

「と、いうことは・・・・・・」

再び、白龍は蛇黒のほうを向き、もう一人の女性に視線を向けた

「精鋭隊の華、蒼犬(そうけん)将軍ってことか♪」

何故か万遍の笑みを浮かべる白龍に蒼犬は鋭い視線を向けた

「あー・・・あいつはやめといたほうがいいですぜ?人一倍気が強い女だ。」

「それもまた一興♪」

「“女好き”も有名なままか。」

白龍の軽いノリに黄猿も面白そうに笑った。

「ところで、白龍。ここに何をしにきた？

まさか貴様までも狼銀についたなどとはほざくなよ？」

「まさか？私はただ・・・」

蛇黒の問いに、白龍は跪いたままの少女に目を向ける

「強い花に興味があるだけだよ」

蛇黒の深いため息にもひるまず、白龍は少女に手を差し出した

「さぁさぁ、立ってごらん。

手荒な真似をしてしまったね。許しておくれ。

蛇黒は昔から変わったことが好きでな、驚かせたかったのだよ。」

笑顔で話す彼の手を借りず、彼女は無言で自ら立ち上がる。

「ところで、君の名前を教えてくれるかい？
あぁ、私の名前は白龍だ。好きに呼んでくれてかまわない。」

すると、彼女は蛇黒に向かって左手で拳を作り挨拶をする。
それに対して蛇黒は右手の掌を見せ、挨拶を返した。
返答を貰うと、少女は黙ってその場を立ち去り、さっさと大広間から出て行ったのだ。

「ずいぶん嫌わてしまったものだな。」

「白龍、まさか鬼に会いに来たのか。」

「その通り！噂通りに強い花のようだな！」

蛇黒に向き直り、白龍は万遍の笑みをむける。
その様子に蒼犬は顔を益々しかめさせ、黄猿は声を上げて笑う。

「はっはっは！！大した御人だな！！
女見たさのためだけにこんな危険な場所に入り込んでくるたぁ！！」

「昔からそういう男だ。

蒼犬、宴の準備をしろ。白龍を手厚く持成せ。」

「はっ、かしこまりました！！」

蒼犬も左手で拳をつくり挨拶をし、そのまま立ち去った。

「ところで、蛇黒。彼女の名前はなんという？」

「紅鬼（こうき）、ここではそう呼ばれている。」

「ずいぶんと物騒な名前だな。」

「だから鬼って呼ばれてんでしょう？」

「とても鬼には見えぬ、愛らしいと思ったがな。」

そう聞いて、黄猿はそっと蛇黒に耳打ちする。

「本当にあの不敗の白龍なんですか？」

黄猿の言葉を聞き、口の端を少しあげ、蛇黒は答えた。

「昔からそういう男だと言っただろ。」

どう見ても、ただの女好きにしか見えないが。
どんな監視も見抜けず、ここまで忍び込んできたのだから、
只者ではないと黄猿は思った。

続く

第3話「貴様は興味を持つだろうな」

“不敗の白龍”の名前は有名だった。
どこの軍にも属さず、ただ一人放浪している男だったが、
一度、刀を手に持たせれば誰も彼に勝てなかった。

彼に挑み敗れたものは、二度と剣を持てる事は無い。
武人の心すらへし折ってしまう。
時に人々は言う、白龍は「絶対零度の冷酷な剣」を持つと。

それととにかく女好き。
これまた見目麗しい色男のため、女性に困ったことは無い。
幾人もの女人に手を出しては泣かせてきた。
酷い男だとわかっていても、彼に言い寄られては二度と抜け出せない。
挙句、あっさりと捨てられてしまうものだから性質が悪い。

武人に対しても冷酷だが女に対しても冷酷。
そうして、彼の名は世に広がっている。

「ふむ、お酒は飲めるんだね。」

飽きもせず、白龍は紅鬼に声をかける。
だが、一度たりとて彼女から返事が返ってきたことは無い。

宴会の席に紅鬼は出席していた。
彼女は常に蛇黒の一歩後ろで控えていた。

白龍は自分の席を用意してもらっているにも拘らず、
自分の食べ物と共に紅鬼の横に移動している状態だ。
その様を蒼犬は眉間に皺をよせ、不機嫌そうに眺め、
黄猿は今にも笑いを噴出すのをこらえていた。

「蛇黒に剣を向けたことをまだ怒っているのか？
あれは挨拶代わりの冗談なんだ、わかってもらえないのか？」

なおも無言で箸をすすめる紅鬼は、白龍に見向きもしない。
それでも彼女の顔を覗き込むように、彼が距離を縮めてきた。
すると紅鬼は彼の食事の乗った膳を丸ごと、床を滑らせ移動させた。
そこは蛇黒の隣りに設けられた白龍の席であった。
やれやれ埒が明かないかと、ようやく彼は自らの席へ戻る。
隣りで静かに酒を傾ける蛇黒に愚痴をこぼす。

「お前はずいぶんと可愛げのない女を使っているんだな。」
「なんだ、もう諦めたのか。」
「いや、今はお前のご機嫌を取ったほうが得策のようだ。
ずいぶんお前になついているようだしな。」

紅鬼は軍の中でも蛇黒に従順な人間だった。
蒼犬も実に充実な人間ではあるが、彼女に負けず劣らず、
とにかくぴったりと蛇黒の身を守るのだ。

だが、ついに黄猿が堪え切れずに噴出して腹を抱えて大笑いし出す。

「食事の場ではしたないぞ、黄猿」

より一層不機嫌になった蒼犬が諌めるが、黄猿は「でも」と言いながら笑い転げる。

「おい、蛇黒。お前は俺に何か隠し事しているのか？」

さすがに不審に思い、問い詰める。
だが、彼は変わらず酒を傾ける。

「気になるなら自分で聞けばよい。」

仕方なしに、黄猿に鋭い視線を向けると彼は観念したように苦笑いを浮かべた。

「その鬼子は、口をきかないんじゃなくて、きけないんですよ。」

「どういうことだ？」

「声が出ないんだ、喉を毒でやられちまってね。」

驚いて紅鬼に視線を向けるが、彼女は黙々と食事をとっている。

「本当に知らないんですか？“紅鬼一族”のこと」

黄猿の言葉に眉間に皺を寄せる。
すると蛇黒がようやく話を始めた。

「“紅鬼”とは称号のようなものだ。

先代はあれの母親が紅鬼と名乗っていた。」

「知らないな、どんな一族だ？」

「先祖代々武術や戦術、ありとあらゆる戦に長けた一族だ。

知性を持ち、武力を持ち、ただ戦で刀を振るうためだけに存在する。」

「毒を盛られたのか？」

「いいんやぁ、それは違いますぜ。」

黄猿はぐいっと杯の酒を飲み干すと、嬉しそうに話す。

「自ら飲んだのさ。」

再び、紅鬼に視線を向ける。
彼女はその視線に首を傾ける。
どうやら、こちらの会話など全く聞いていないらしい。

「あの一族は可笑しなことに、弱い人間を必要としない。
一定の年齢になるとそれぞれが毒を飲み干すことになるんですよ。
」

それで“強い”運があれば生き残り
運が“弱”ければ命を落とす。
まさに運すらも弱者と強者を表す世界だった。

「それで生き残ったのは声を失ったあいつだけってわけです。」

耳は聞こえているそうだが、反応を示さないのは、
蛇黒以外の人間に興味を持たないためといわれている。

「益々、貴様は興味を持つだろうな、白龍。」

「もう、そりゃ。」

堪らないほど嬉しそうに紅鬼を見つめる。
今までに会ったことの無い女だ。益々興味が湧いた。
そんじょそこらにいる女とはわけが違う。
戦うためだけに生まれ育てられ、一人の人間以外に反応を示さない。

これほど面白い人材はいまだかつて見たことが無い。

白龍の女好きには悪い癖がいくつもある。
いかに女を泣かせても、自分に夢中にさせておけるか。
一度に何人の女人を相手にできるか。
噂を聞くだけでも気分が悪くなる癖ばかりだが、
中でも、男に興味が無く、“難攻不落”と呼ばれる女性を
口説き落とすことには殊更、夢中になる。
堅牢な城ほどじわりじわりと攻めて攻略するのが何より楽しいと、
彼は思う。

より一層楽しみを得た白龍は再び、紅鬼に近づいた。

「なぁ、紅鬼殿。もしよければ明日でも…」

と声をかけた瞬間

ずどん

と、白龍の目前に彼女の愛刀が床に突き立てられた。
何事かと思い、視線をあげると、ちょうど彼女は立ち上がったところだ。
彼と視線があうと、首をかしげ不思議そうな顔をしたが
すぐに蛇黒に向き直り、また拳で礼をする。
蛇黒の返答をもらうと、愛刀を引き抜き、颯爽と部屋を後にした。
食膳を見ると見事に空っぽである。

「あと、鬼子は礼儀も何もなっちゃいないんで、
相手にするだけでも苦労すると思いますわ！」

腹を抱えて笑いながら、黄猿は白龍に助言した。
流石の白龍も彼女に“人間”として相手をしてもらえるものか不安になった。

続く

第４話「尽くすことが生き甲斐よ」

早朝、白龍は二階から外を眺めていた。
与えられた一室を出た廊下から、それは微かに見える。
見れば見るほど噂とは掛け離れたその姿に、疑問を覚える。

「のぞき見とはずいぶん趣味が悪い。」

声の主は蒼犬だった。
朝も早くから相変わらず無愛想な表情だ。

「たまたま見つけただけだ。

何をしているのかと気になってな。

しかし…彼女は庭いじりが好きなのか？」

視線の先には、庭園と思われる場所で、
雑草を引き抜く紅鬼の姿があった。
手慣れている様からして、毎朝行っているように見える。

「あの植物が何かご存知か？」

指で示され、見覚えが無かったため、素直に首を横に振った。

「あれの根は猛毒で、体内に入れば二度と助からぬ。」

しれっと話す蒼犬に対し、白龍はぞくりと首筋が冷えた。

「あっちの植物は麻痺の効果があり、大の大人がものの数分で動けなくなる。

あちらは、死にはしないが体に痛みを残し、治す方法は無い。あれに至っては…」

「もういい。そんな酷な話は朝から聞きたくない。」

ついに白龍が根をあげた。
つまりは彼女が育てているものは一般的に毒と呼ばれるもので、恐らく戦に使われるものだ。

「あの一族はやたらと毒に詳しく、それの育て方も熟知している。

まぁ、全ては戦うためだがな。」

戦い、勝利のためにありとあらゆる手段を使う。
自ら必要とすれば毒すらも育てる。

小柄な少女の見た目から、ずいぶんと冷酷な一面が見て取れる。
それでも植物が何かわからなければ、食事の準備をする健気な乙女に見えるのに。

「そういえば、蒼犬殿もずいぶんと毒植物に詳しいようだが？」

いやらしい笑みを彼女に向けたが、蒼犬はかえって自信の笑みを浮かべて答える。

「蛇黒様の懐で素性の知れぬ毒を勝手に育てさせるわけにはいかないのでな！」

嬉しそうだ。
そうだ、彼女もまた軍の中でも有名な蛇黒“信者”だ。
紅鬼にしても蒼犬にしても蛇黒の何がそんなに魅力的なのか。
先にそちらを解明したほうが、たやすい気がしてきた。

「そんなに蛇黒が好きか？」

「あの方にお仕え出来ることが私の誇りであり、尽くすことが生き甲斐よ。

貴殿には理解出来ぬであろうがな。」

白龍自身、蛇黒を気に入っている。
だからこうして面白ついでに訪問したのだ。

だが、彼の臣下になりたいとも、力を貸したいとも思ったことは無い。
蛇黒の残虐で非道な政治はとうに知っている。
知ってはいても、旧知の仲であることに変わりはしないし、
手助けしないことも互いに理解しあえている。

だからこそ、対等な立場で会話が交わせられるのだ。
よく知っているからこそ、理解出来ない。
何故、彼に仕えることが出来るのか。

『女心とは、真に理解しがたい。』

ため息をつきながら、再び庭いじりをする紅鬼に視線を移した。

その時、

カーンカーンカーン　鐘が鳴らされ、城内が騒がしくなる。
音が聞こえた瞬間に紅鬼は口笛をならした。
すると一頭の白馬が突然現れ、彼女はしなやかに跨がると走り去った。

「何事だ…？」

「戦の合図だ。狼銀軍が攻めてきたのであろう。」
「ずいぶん呑気だな。
軍師ともあろう蒼犬将軍が、そんな大事な時にこんな場所で油を売っててもよいのか？」
「私の出番では無いからな。」
「？」
疑問の表情を見せた白龍に蒼犬は余裕の笑みを見せる。
「ついてくるとよい。
何故、鬼娘が紅鬼と呼ばれるのか、その目で確認させてやる。」
大人しく彼女のあとについて行く。
やがて到着したのは、城下の先の大門の先にある高台。
大門の向こうでは蛇黒軍と狼銀軍が対峙していた。
ここは戦場を一望出来る、蛇黒軍が本拠地として使っている場所だった。
一足先に蛇黒と黄猿は到着していたようで、軽く挨拶をした。

「黄猿将軍もここに居る気か？」

「俺の出番じゃ無いんでね。」

益々、疑問を浮かべる白龍。
蛇黒はまだ静かな戦場を見つめる。
その視線の先にはゆっくりと進んでくる狼銀軍の大群。
こちら側の蛇黒の軍は並んでいるだけであって、なんの動きも無い。

大丈夫なのか？と心配になるが、蛇黒の表情は口許に笑みを浮かべていた。

その時、ドン・ドン・ドンと太鼓の音が鳴りはじめた。
すると真っ黒な蛇黒軍に一筋の道があけられた。
その道を真っ直ぐにかけていく姿が見えた。

真っ白な馬に跨がり、赤みを帯びた大刀を構え、迷うことなくかけていく。
それは見紛うことなき、紅鬼の姿であった。

続く

第5話「何がお前をこんなにも」

その様を何と例えて表現すればいい？
白龍は声をあげることすら出来ずに、ただその光景を見ていた。

白馬に跨がった少女は、ただ一騎で敵軍に向かい、敵陣に突っ込んだ。
すぐにその姿は敵陣に飲み込まれ見えなくなった。

あまりに無茶だと思った。
蛇黒に詰め寄ろうとしたその瞬間。
けたたましい叫び声が幾つも上がる。

何事かと視線を戦場に戻すと、狼銀軍の銀色の軍隊の一部が真っ赤に染め上がる。
ずいぶんと離れたこの場所からでもはっきり見てとれるほど、それは見える。
徐々にそれは広がり、真っ赤な道が出来上がる。

そこには全身に返り血を浴び、
折り重なって倒れた敵兵の中心にただ一人、
大刀を構えて立つ紅鬼の姿があった。

白龍は思わず戦場のほうへ近づいた。
本拠地の中でももっと戦場の際へ。
兵達に止められるほど進む。

再び紅鬼は走り出した。
彼女の大刀が敵陣を舞う。

それは力強く振りかざされ、人にきりこまれてゆく。
時に、彼女の手から離れたかと思うと、
その手と刀を布で繋ぎ、まるで鎌のようにきりつけられていく。

一度、彼女が動けば数多の赤が宙を舞い、
その後には血塗られた生々しい道が残る。

突如、彼女の前に倍はあろう体格の武将が立ちはだかる。
狼銀軍の中でも名の通った将軍だ。

彼の姿に、足を止め、一呼吸つく紅鬼。
だが敵将が一歩動くと同時に、
彼女も大きな一歩を踏み出し、迷わず彼に立ち向かう。

それは一瞬。

突然現れた白馬を踏み台に、紅鬼は宙を飛ぶ。
その体は円を描き、敵将の頭上を飛び越えた。
次に見えたものは、動きを止め、地面に倒れた敵将の体。
頭と胴体は見事に切り離されていた。

それでも紅鬼は止まらない。
ただひたすらに大刀を奮い、次から次へと死道を作っていく。
血を浴びることを気にも止めず、
倒れていく人間も捨てて、迷うこと無く戦場をかける。
ただ一人で。

小柄な体は真っ赤に染まり、悲鳴や叫び声を幾多も生み出していく。

「――――――――紅鬼。」

その声に視線を向ければ、笑みを浮かべた蛇黒の顔があった。
先程と変わらず、椅子に腰掛け、戦場を見つめる。

「これが、先祖代々受け継がれてきた、鬼の名の由来よ。」

流石に蛇黒以外の人間は、無表情だった。
その感情を知り得ることは出来ないが、ただ蛇黒だけはこの状況を楽しんでいる。
それだけは確かだと白龍は確信した。

そんな男だっただろうか？

かつての友を思い出す。
決して善とは言い難い性格ではあったが、戦場を楽しむ男では無かった。
武力も知略もあり、人望もあった。
器用な男では無かったが、
真っ直ぐで豪胆で力強い姿は、人を引き付けるものがあった。

だからこそ、次代の皇帝に相応しいと称された。
だが、彼は今や誰もが恐れる残虐非道な悪帝。

『何がお前をこんなにも変えたんだ？』

しばらく見ない間に、ずいぶんと変わってしまった旧友を想った。
あの頃の面影を微塵も感じられないことに心を痛める。

やがて、太鼓の音が鳴り響く。
狼銀軍の撤退の合図だ。

それに合わせ、蛇黒軍の撤退の合図も鳴り、紅鬼も自軍へ戻る。
手土産を携えて。

本拠地の入口にそれは並べられた。
合計で１０体が横一列に。
紅鬼が勝ち取った、勝利の証。

名が通った敵将の生首だ。

臣下によって、片っ端から名前を読み上げられる。
紅鬼は血を浴びたまま、蛇黒の言葉を待つ。
読み上げ終え、名前の書かれた書物が蛇黒に手渡された。

「あれは何をしているんだ？」

「数を数えているのさ。」

白龍の問いに、黄猿は静かに答える。
しかめ面を見せる彼に黄猿はそっと耳打ちした。

「“名の通った敵将の首を千取ってくれば、一族もろとも解放してやる。”

それが陛下が鬼子に出した約束事さ。」

その約束のために彼女は刀をふるうのだ。と教えてくれた。

「まぁ、昔は母親が生きていたからあれだったが、

今はあの娘ただ一人だけ。

それでも、あの鬼子はその約束を果たそうとしてんのさ。」

ちょうど黄猿が話終えた頃、蛇黒が言い放つ。

「最後の一つの名が無いぞ?」

「はい、どうやら最近将軍に格上げされた者のようでして…。」

銀色の鎧に狼銀の紋章が入っているのは、将軍の証。

紅鬼はそれを目印に、その首を狙う。

「名がわからんのであれば、数には入れぬ。今日は九つだ。」

周りの臣下達は少しざわついたが、
当の本人の紅鬼は気にも留めず、
いつものように拳で礼をとる。

挨拶をもらい、彼女は白馬に跨がり颯爽と去って行った。

「どこへ？」

「近くの泉に行ったんですよ。いつも戦のあとはそこに行く。」

気になるなら行ってくればいいと、黄猿は笑って言った。
蛇黒に視線をやると、ふっと嫌な笑顔を見せて城に帰って行く。

白龍は馬を借り、教えられた泉へ向かった。

続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4405z/

鬼と龍

2011年12月15日02時57分発行